

3・衝撃の事実！ えっちしないと、人間でいられない！

1 から数日後。夜二十一時ごろ。モニカの自室。

モニカ、主人公に自室を与えられ、さっそく住める状態にすべく、荷物を整理している。いかんせん急な事なので、与えられたのは主人公のおさがりばかりだが、それでもモニカは有頂天。嬉しさのあまり、片づけながら独り言をしゃべっている。

主人公は別の部屋にいる。

**SE1**…部屋の環境音 【トラック1のSE1と同じ音。トラック終了までごく小さな音で流す】

**SE2**…『ガサゴソ』と、モニカが荷物を整理する音 【トラック1のSE7と同じ音。30〜36秒ほどまでを、若干大きめのボリュームで流す】

「鼻歌を歌いながら荷物を整理している」

ふん、ふん、ふーん♪

【※マークまで明るく、わざと説明口調で話す】

こうしてパグ犬（けん）のモニカは。

大好きなあの人と、ついに人間として同棲生活を送る事になったのだわ！ ※

はあ。お父さんとお母さんに深く追及されなくてよかったわ。

『無事かどうか写真送って』とか言われたらどうしようと思ったけど。

まあ、基本的に適当なのよねうちの人達って。

【『あの人』は主人公の事】

それからあの人を悩ませてた仕事相手の人も。

最近はすっかりおとなしくなったようだし。

これで仕事も少しは楽になるわね。

早速私のアルバイト先も決まったし。何だか順調すぎて怖い位だわ！

【やる気満々で】

明日から念願のお花屋さんよ！ 頑張るわー！

【少し間を置いて】

それにしても、あの不思議なお姉さんの紹介とはいえ。

『犬です』って正直に言っても雇ってもらえるなんて。

あの店っていうか、この街自体どうなってるのかしら。

まさか『犬ならあんまり珍しくないですね』って言われるとは思わなかったわ。

【『ハッ！』と思に至る】

もしかしたら私が知らないだけで、この辺には人間じゃないものがいっぱい住んでるのかしら。

……いつかそんなお友達が、普通にできちゃったり？

【想像するだけで、ちょっと楽しくなってくる】

幽霊とか……人魚とか……宇宙人……とか？

【そんなのありえないと笑い飛ばす】

フフフ！ まさかね！

そんなの『人外娘（じんがいむすめ）が大渋滞！』だわ！」

そこで電話がかかってくる。

モニカ、人間になれたといえど、電話はまだ慣れないので、内心かなりビクビクしている。

SE3…電話の着信音 【0―3秒ほどまで流す。2コール分。その後、ボリュームを落と

して、SE5までセリフの邪魔にならないように重ねて流す】

「【内心かなりビクビクしている】

おっと！ 電話だわ。

【冷静なふりを装い、ドヤっている】

でも私は慌てたりしないの。もう人間だからね……」

モニカ、スマホの表示から、相手の名前を確認する。

それは先ほど話題に出た『あのお姉さん』であった。

『あのお姉さん』は、モニカを人間にした張本人。

とある大学で『人ならざるものの生活をサポートする』という、謎の研究をしている人である。

モニカは彼女に、犬から人間にしてもらう代わりに、定期的に大学へ行って検査やテストを受け、そのデータを提供するという契約で人間にしてもらっている。

なので彼女と話す時は、かなり緊張する。

SE4…モニカがスマホを手取る音 【すべて流す。ボリュームは小さめにする】

SE5…モニカがスマホを操作する『ピッ』という音 【すべて流す。『ピッ』と1回】

〈電話の相手〉

「もしもし？ 私だけど。」

今時間大丈夫？ 検査の結果が出たわ」

「【主人公を相手にする時よりかしこまっている】

こんにちは！ はい！ モニカです！ 大丈夫です！

検査の結果はどうでした？」

〈電話の相手〉

「残念だけど、貴方の身体が完全に人間になっていない事が発覚したわ。こちらでも対……」

【真っ青になる。『こちらでも』から先の事は全く聞いていない】

えっ？ そんなの聞いてないです！

電話の相手、モニカが話を聞かないので呆れている。

電話の相手、予定では

『こちらでも対処するけど、当分は次の事に気を付けてほしい』

『とりあえず応急処置として、明日にでも大学に来てほしい』

と説明するつもりだった。

が、ここはあえてそれを話さず、少し意地悪してやろうか……。という気分になってくる。

〈電話の相手〉

「……そんなの当たり前でしょう。

貴方、あの日、話を聞く前に飛び出して行ったんだから」

「うぐぐ……。それを言われると、ぐうの音（ね）も出ません……。

でも。私の身体が完全に人間になれていないって事は、つまり……」

〈電話の相手〉

「……それはすなわち。

『アレ』を行わなくてはならないという事ね」

【とても不安で、自信がない】

で、できるんでしょうか。私……」

〈電話の相手〉

『できるんでしょうか』じゃないでしょうか？ やるのよ。

貴方。もともと彼女とそうなりたくて人間になったんじゃないの？

これは逆に、勇気を出すチャンスなんじゃない？」

「……」

〈電話の相手〉

「……まあ冗」

電話の相手『まあ冗談はこのくらいにして』と、本来の説明を始めようとする。  
しかし、モニカ、までも全く聞いていない。  
勢いよく立ち上がる。

**SE 6**…モニカが勢いよく立ち上がる音 【すべて流す】

「わかりました！ やります！ やってやろうじゃありませんか！」

〈電話の相手〉

「えっ」

「【不安のあまり、しゃべり方が変になっている】

けけっ結果を。楽しみにしてて下さいよね！  
それでは！」

**SE 7**…『ピッ』とモニカが電話を切る音 【SE 5と同じ音。すべて流す。『ピッ』と1回】

**SE 8**…主人公がドアをノックする音【すべて流す。SE 7の電話を切る音とほぼ同時で、あまり聞こえない】

**SE 9**…主人公が部屋に入ってくる足音 【すべて流す】

〈主人公〉

「おーい」

**SE 10**…モニカが勢いよく飛び跳ねる音 【すべて流す】

「【非常に驚く。主人公がいる事に、今気づく】

ふぎやっ！ いつからいたの？  
ノノノノック位してよね！」

主人公、内心『ノがずいぶん多いな』と思っている。

〈主人公〉

「えー？　したよー？　どうしたの。何かあった？」

【声が震える。真っ青になりながら】

そう。何かあったの。大変なのよ。

【おずおずと】

あの……ね。突然なんだけどあなたに頼みがあるの。

あの。何も聞かずに……私と……」

主人公、明らかにモニカの様子がおかしいので『何かあったのだろう』と察する。  
とりあえずモニカの目の前まで行き、話を聞こうとする。

しかし、モニカが具体的に何を話したいのかはわからない。キョトンと問い返す。

SE11 …主人公がモニカに向かって歩いてくる音 【SE9と同じ音。2回分繰り返して流す】

〈主人公〉

「うん？　『私と』？　なんででしょう？」

対するモニカ、主人公が真面目に話を聞いてくれる雰囲気なので、かえって申し訳なくなってくる。

これから自分をお願いしたい事は、あまりにもバカバカしいというか、嘘っぽいというか『どうしてそうなった』なので、信じてもらえる氣もしない。

おそらく無理だろうとわかっていながら『とりあえず自分一人で何とかしてみよう』と思  
い、主人公を追い出してしまう。

「やっぱり何でもないわ！

あの！　今日はもう寝るから！

急ぎの用事でないなら明日に改めてもらえるかしら！」

〈主人公〉

「あ、そう？　じゃあまた明日にするね……」

「ええ！　そうしてもらえると助かるわ！

ではまた明日！　グンナイ！」

SE12 …モニカが主人公を追い出す足音 【すべて流し、2回繰り返す。スピードをかな

り上げて、無理やり追い出している印象にする】

**SE13** …モニカが勢い早めに自室のふすまを閉める音 【すべて流す】

主人公『頼みごとがある』と言われたと思いきや追い出され、突然の事にポカンとしている。

しかし部屋の前で呆然と立っていると、再び扉が開いて、モニカが申し訳なさそうに出てくる。

**SE14** …モニカがふすまを『そろそろそろ……』と開ける音 【0～3秒ほどまで流す】

「いめんね。おやすみなさい……」

**SE15** …モニカが扉を『そろそろそろ……』と閉める音 【SE14と同じ音。そのまま

続きの4～11秒を流す】

しばし間。

そのまま環境音のみで、やがてフェードアウトする。